

## ヴィルヘルム・フォン・フンボルトのバガヴァッド・ギーター理解

中村 元

### 序論

バガヴァッド・ギーター（「神の歌」を意味する。以下、ギーターと表記する）は、インドの古代叙事詩マハーバーラタの中に編入された、700 連に及ぶ 2 行詩から成り立つ哲学詩篇で、全 18 章から成り立っている。その原型は紀元前 3 ～2 世紀頃成立し、紀元後現在の形にまとめられたと推定されているが、今日に至るまでヒンドゥー教徒の間で、2000 年以上にわたって最も幅広く読まれ、またこの上なく尊重されている聖典である。このためギーターは数あるインド古代文学の中でも最初にヨーロッパの言語に翻訳された。1785 年チャールズ・ウィルキンズによるサンスクリットからの英語による全訳がそれである。

ヴィルヘルム・フォン・フンボルト(1787-1835)の友人だったシュレーゲル兄弟の兄、アウグスト・ヴィルヘルム・シュレーゲル (1767-1845)<sup>1)</sup>は、1823 年にギーターのテキスト校訂版にラテン語訳を付けて出版した。フンボルトは 1819 年末に 52 歳で政治家外交官の職を辞して、学者文人として活動するようになってから集中的にサンスクリットに関わるようになっていたが<sup>2)</sup>、シュレーゲルのギーター訳をきっかけに、フンボルトは自らギーターのドイツ語訳を試み、ギーターに関する 2 本の論文を発表した。その一つは、「バガヴァッド・ギーターの名で知られたマハーバーラタのエピソードについて Ueber die unter dem Namen Bhagavad-Gita bekannte Episode des Maha-bharata」という論文（以下ギーター論と略す）で、これは、ベルリンの王立アカデミーの歴史文献学会で 1825 年 6 月 30 日と 1826 年 7 月 15 日の二回の講演に基づいて執筆されたものである。もう一つは、「バガヴァッド・ギーターについて——パリの『アジア学雑誌』に掲載されたシュレーゲル版の論評に関連して Ueber die Bhagavad-Gita. Mit Bezug auf die Beurtheilung der Schlegelschen Ausgabe im Pariser Asiatischen Journal」である。これはシュレーゲルのギーター訳に対して、サンスクリット学者のラングロワが『アジア学雑誌』で行った批評<sup>3)</sup>へのフンボルトの所感を表明したもので、元の草稿は「シュレーゲル版バガヴァッド・ギーターへのラ

ングロワの論評についてのコメント」という表題で、当時ボンにいたシュレーゲルに宛てて 1825 年 6 月 17 日付で送られた書簡である<sup>4)</sup>。

本稿は、フンボルトのギター論に基づいて彼のギターの哲学体系理解の概要を示すことを目的としている。彼のギター論では、おおまかに言うと、ギターの「行為」に対する見方、すなわち「行為のヨーガ（カルマヨーガ）」という思想と、その背景にあるギターの神理解ならびに神への到達法が紹介されているが、今回は、ギターの行為に対する見方を集中的に取り上げ、加えて、フンボルトが見たギターの詩形式における特徴、とりわけギターの詩の形式と内容の関係を説明する「哲学詩」という概念を検証してみたい。フンボルトが解釈したギターの神理解ならびに神への到達法についてはまた機会を改めて論じるつもりである。

## 1. 行為の哲学

### 1.1 ギターの発端

叙事詩マハーバーラタで、パンドゥーの息子（パンドヴァ）で第三王子のアルジュナは彼の叔父に当たるクル族（カウラヴァ）のドリタラーシュトラ王の息子たちとの戦いに赴く。この時、ヴィシュヌの化身であるクリシュナは人間の姿で、アルジュナの友人として戦車の御者を勤める。ところが、アルジュナは敵の軍勢の中に実際に自分の血族や師匠、友人たちがいるのを見て、勝っても負けても自分の人生になくってはならない人たちと戦ってどんな喜びがあるだろうか、と戦いへの疑念に駆られ、悲しみにうちひしがれて弓矢を捨て、座り込んでしまい、クリシュナにこう訴える。

「クリシュナよ、戦おうとして立ちならぶこれらの親族を見て、私の四肢は沈み込み、口は干涸び、私の体は震え、総毛立つ。ガンディーヴァ弓は手から落ち、皮膚は焼かれるようだ。私は立っていることが出来ない。私の心はさまようかのようだ。私はまた不吉な兆しを見る。そしてクリシュナよ、戦いにおいて親族を殺せば、よい結果にはなるまい。クリシュナよ、私は勝利を望まない。王国や幸福をも望まない。ゴーヴィンダよ、私にとって王国が何になる。享楽や生命が何になる」。[...] アルジ

ユナはこのように告げ、戦いのさなか、戦車の座席に座り込んだ。弓と矢を投げ捨て、悲しみに心乱れて [...]。(I, 28-32; 47)<sup>5)</sup>

こうして、アルジュナは戦うべきか否かクリシュナに助言を乞うのである。すると、クリシュナは自己の哲学を語りながら、戦いを進めるようアルジュナを勇気づける。こうして、パーンダヴァとカウラヴァの二大軍勢が一触即発の状態に対峙するのを目の前にして、二人の対話が始まる。

このように、自らの生死と一族の存亡を賭けた一大決戦が今にも始まろうとしているとき、人間の究極の認識についての最も抽象的な思弁哲学が展開されているところに、ギターの希有な特徴が見て取られる(159)<sup>6)</sup>。ちなみに、興味深いのは、ギターの作者はヴィヤーサ仙とされているが、クリシュナとアルジュナの対話を説明しているのは彼ではなく、ヴィヤーサ仙が、彼の盲目の息子ドリタラーシュトラに戦況を報告させるために、千里眼を与えた御者のサンジャヤであったということである。

## 1.2 ギターの概要

フンボルトはギター論の第二部で、ギターの各章の内容の大まかな見取り図を描いているので、それを掲げておく。

第1章 歴史関係。クリシュナとアルジュナの対話がどのようにして生まれたか。

第2章 各章の中で一番美しく、また最も崇高な箇所。ギターの世界観の思想体系全体の基礎をなす部分。すなわち、精神(個我)は不滅であること。存在から非存在への移行もしくはその逆は不可能であること。したがって、死ならびに行為の結果に執着する必要はないこと。理性による知識(サーンキヤ)と宗教的沈潜(ヨーガ)との対立。自己を宗教的沈潜に捧げる人の自己の内面への帰入。これらすべての哲学的理由の故に、クリシュナはアルジュナを繰り返し戦いに向けて鼓舞する。

第3章 アルジュナは、クリシュナのこれらの忠告が従来勧められてきた内的沈潜とは矛盾することを知り、目標に至るための真理を解き明か

してくれるよう、クリシュナに懇願する。すると、クリシュナはこの見かけ上の矛盾を解き明かし、学問によって教育された人々の知識の体系（サーンキヤ）と宗教に沈潜した人々の行為の体系（ヨーガ）を対比して、行為においては、行為のあらゆる結果を放棄すべき必要性を示す。

第4章 クリシュナはヨーガの教えを説明し、自らの行為の必要性を示しながら、行為の性質全般に話題を移していき、知識というものは行為よりもさらに高い段階であって、知識に専念して行為の絆を解きほぐし、疑惑を断ち切らねばならない、と説く。

第5章 行為することは行為を断念することよりも優れている。すなわち理性の教えと沈潜の教え（サーンキヤ説とヨーガ説）は本来同じものであって、沈潜（ヨーガ）なくしては行為の断念は難しい。真の断念とは行為をしないことではなく、行為の結果を放棄することである。

第6章 第5章の続き。

第7章 この章では、もっぱら神の本質が言い表されている。すなわち神の中には八つからなる低次の性質と高次の性質が存在する。最後の部分で、ブラフマン（神性）と行為、そして精神に関する、神々に関する、祭祀に関する事柄が、実際に規定された一般概念として語られる。

第8章 クリシュナはアルジュナの要請に応じて、これらの概念に手短かな定義を与える。その際、専心者と精神（プルシヤ）という言葉が使用されている。残りの部分は輪廻再生とそれからの解脱、ブラフマンの世界の、一千世期（Weltalter, サンスクリットで「ユガ」）<sup>7)</sup>に及ぶ昼と夜が語られる。

第9章 先に述べられた考えに加え、神的存在と被造物との関係がさらに詳しく描かれている。世期が経つうちに事物全体が神に帰入し、また再度神のもとから出ていく様子が描かれる。

第10章 神的存在とは何か、普遍的また個別的に神の中にあるものは何かを説明する。

第11章 アルジュナは、クリシュナが自分自身についてアルジュナに言葉で語ったように、クリシュナの真の姿を実際に現してほしいと懇願する。すると、クリシュナは彼の願いを聞き届けて、自らの姿をアルジ

ユナの目の前に現し、そしてアルジュナに戦いを始めるようにと促す。  
第 12 章 どのように神を礼拝すべきか、どのようにして神の愛にあずかるかを論じ、その中で同時に専心者の概念に立ち戻る。

第 13 章 質料(Stoff, これに当たるサンスクリットの語はクシェートラ kshetra。上村勝彦訳では「土地」と「質料に通じた者」、認識と認識されるべきもの、自然(プラクリティ)と絶対知における精神(プルシャ)の概念が展開される。

第 14 章 受胎する神性ブラフマンと、受胎させ万物を生み出して自己活動する神クリシュナとの区別。すでにこれまで何度か折に触れて述べられた自然界の三つの性質、もしくは要素(グナ)<sup>8)</sup>がここで完全に説明される。グナの知識との関係、ならびに各グナにより支配された人の運命、グナから脱却する方法が示される。

第 15 章 聖なるイチジクの木の比喻。インドの観念によると、それは生命の樹であって、あらゆるところに広がっていく旺盛な生殖力のシンボルである。その枝は自然の諸性質、つまりグナから養分を得て、感覚の対象の中から萌え出てくる。その根は人間世界では行為によって固定されている。その葉は、ヴェーダ賛歌である。イチジクの木は物理的というだけでなく、精神的、特に宗教的生命の樹であり、樹はその枝と根を同時に上下に広げる。これによって、地面に垂れ下がった枝から根が生えて、さらにその根が地中にもぐって新しい樹が生長するというような樹の性質を暗示する。このことによって、再生と永遠という考え方が示されている。[...] けれども、その根が広がると、無執着の斧でこれを断ち切り、現世に再び回帰することのない道を探し求めねばならない。[...] 残りの部分では、神は被造物の中でどのように創造し、維持し、活動しているかが扱われ、これに、すでに論じられた三つのプルシャの教えが結びつく。

第 16 章 この章では、前もって神的運命のもとに生まれついた者と阿修羅的運命のもとに生まれついた者について論じられる。情欲もしくは感覚的享楽、怒り、そして強欲は地獄の三つの門と言われるが、阿修羅的性質を持った人が最後に到達するのはそこである。この章は教典の遵

守を勧めて終わる。

第 17 章 三つの自然の性質（グナ）の教えを、神と神の礼拝に向かう人間の心情と行為に、また信仰、祭祀、贖罪、布施に適用している。最後に、神の本質を表現する一音節から出来た三つの言葉、オーム、タット、サットを説明する。[...]

第 18 章 最終章は行為の概念に戻って、行為とそれに際して生じるその誘因をより正確に論じ、さらにその他のいくつかの概念、すなわち認識、知性、忍耐、充足などに、自然の三つの性質（グナ）の教えを適用する。四つのカーストとその義務、その使命、そして各カーストの制約内にとどまる必要性を論じる。このあと、結論と、秘密の教えとして講じられた教えが賞讃され、対話全体を説明する役回りを演じたギターの手サンジャヤがどのようにしてこれを聞いたかという報告が続く。(328–331)

### 1.3 二つの命題

フンボルトはまずギターの体系を説明するにあたってその前提として、クリシュナがアルジュナに教えたギターの様々な哲学内容を、次の二つの命題に要約する(192)。

- 1) 精神は一にして不滅なものであって、その性質全体からして、合成物であるはかない肉体とは別個のものである。
- 2) 完成を目指す者はすべての行為の結果を顧慮することなく、それについて完全な無執着を持って執り行わなければならない。

この二つ命題のうちに、フンボルトはすべての生あるものが生ある限り直面せざるを得ない死と行為という根源的事実を克服する契機を見て取る。

1)の命題については、もし死があくまでも肉体にのみ関わるものであり、精神はこれに何の影響も受けることがないなら、死はもはや恐るべきものではない。クリシュナは言う。「私は決して存在しなかったことはない。あなたも、ここにいる王たちも [...]。また我々はすべて、これから先、存在しなくなるこ

もない」(II, 12)。「この全世界を遍く満たすものを不滅であると知れ。この不滅のものを滅ぼすことは誰も出来ない」(II, 17)。我々の肉体は可視であるが、可變的要素から成り立っており、有限で、死を避けることは出来ないのに対し、我々の精神は不可視であって、永遠不滅で、死ぬことはなく、始めも終わりもない。「彼〔個我〕は決して生まれず、死ぬこともない。彼は生じたこともなくまた存在しなくなることもない。彼は不生、常住、永遠であり太古より存する。体が殺されても彼は殺されることがない」(II, 20)。

ところで、この二つの命題を、ギーターはそれぞれ「サーンキヤ（理論）における知性」、「ヨーガ（実践）における知性」と言い表している。すなわち、「以上、サーンキヤ（理論）における知性が説かれた。次にヨーガ（実践）における知性を聞け。その知性を備えれば、あなたは行為の束縛を離れるであろう」(II, 39)。

2)の命題は、以下のギーターの詩節に基づいている。「あなたの職務は行為のものにある、決してその結果にはない。行為の結果を動機としてはいけない。また無為に執着してはならぬ」(II, 47)。行為が情熱や目的にとらわれずに、単に自然の行為、もしくは義務による命令である場合には、その結果にこだわる必要はなくなる。言い換えれば、義務のために行う行為は自己の特殊な利害に基づくものではないから、摂理を体現するに過ぎない自然の行為と同じもので、精神に影響を与えることはない。

そしてギーターの次の詩節は、行為の束縛を離れるために必要なヨーガ（実践）を述べている部分である。「[...] 三要素（グナ）よりなるものを離れよ。アルジュナ、相対を離れ、常に純質（サットヴァ）に立脚し、獲得と保全を離れ、自己を制御せよ」(II, 45)。「執着を捨て成功と不成功を平等（同一）のものと見て、ヨーガに立脚して諸々の行為をせよ。ヨーガは平等の境地であるといわれる」(II, 48)。「知性を備えた賢者らは、行為から生ずる結果を捨て、生の束縛から解脱し、患（わずら）いのない境地に達する。」(II, 51)。すなわち、三要素から成り立っている現象界から感官を引き離して自己を制御して、相対立するものを平等に見ることの出来る境地（ブラフマンの境地）に達することが、行為の束縛を離れるために必要とされているのであって、そこではヨーガ行者（ヨーギン）の沈潜（瞑想）修行が暗示されているのである。それゆえ、フン



ポルトによると、サーンキヤにあるのは理性的哲学的省察であり、ヨーガにあるのは活動的で理性を経ずに内的沈潜によって真理の直接観照に、すなわち原真理そのものとの合一に達しようとする省察である(163)。

フンボルトは、以上の二つの命題こそクリシュナがアルジュナを戦いへと鼓舞するそもその理由であると理解する。「精神的なものを肉体的なものから完全に分離すること、ならびに行為を棄却することは、両者とも神の認識と観照に至る。前者はあらゆる純粋に精神的なものが同一であることによって肯定的な仕方で、後者は、人間が行為するときに巻き込まれる様々な煩いから離れることによって否定的な仕方で。そしてこうした神の認識と観照から最高の完成が生まれるのである」(196)。すなわち、クリシュナがアルジュナに戦うよう説くのは、他でもなく死と行為を克服するとされるこの二つの命題が真であることを、人間が死と行為の重さをこの上なく切実に体感する戦争という契機を通して認識させるためであった。フンボルトは、これら二つの命題によってギーター体系の基礎が築かれ、また人間が努力して目指す頂点への認識が据えられていると見る。

#### 1.4 行為について

フンボルトは行為が必要とされる理由は三つあると理解する。

第一は、行為は非行為に優先することである。なるほど、行為は精神を現実の諸条件に従属させることによってそれを束縛する。しかしながら、身体を維持しようとする限り、行為を全面的に放棄することは出来ない。というのも、行為は意志に関わりなく生まれるからである。しかし、成功への思いを捨て、行為のために行為するならば、それは自然に行われる行為と同じものとなり、人為的な行為と見なされなくなるという点で、人は行為を無化し滅ぼすことが出来る。このとき、古来より存在する行為と認識の二つの体系は統一される。行為と認識の統一によって人間のうちに呼び起こされるのは、深い沈潜(瞑想)である。というのも、沈潜とは、すでに述べたように、意識が感覚の対象から離れることに他ならず、したがって、行為の結果の無執着による行為の無化と合致するからである。

第二は、アルジュナには行為すべき十分な理由がある。それは、クリシュナ



が彼に説くように、彼が属するカースト身分から生ずる義務<sup>9)</sup>を果たすことである。つまり、義務の命令であるような行為は、特定のカーストの帰属からこそ生じる。「あなたは自己の義務(ダルマ)を考慮してもおののくべきではない。というのはクシャトリヤにとって義務に基づく戦いに勝るものはないから」(II, 31)。クリシュナはこの後さらに続けて、この義務に基づく戦いを行わなければ、罪悪と不名誉を得て、人々からの軽蔑に一生さらされることになる」と説諭し、こう約束する。「あなたは殺されれば天界を得、勝利すれば地上を得るであろう」(II, 37)。以上のように、クシャトリヤの場合、戦うという義務によってたとえ殺人という罪を犯すことになったとしても、これを忠実に守ることが要求される(XIII, 47f.)。

ところで、ギターの冒頭のシーンに戻って、戦いを目前に控えたアルジュナが武具を捨て戦車の中に座り込んでしまうのは、彼が人間としての義務(ダルマ)もしくは倫理観と、社会、すなわちカーストが要求するそれとの葛藤に苦しんでいるからである。つまり、カースト義務に基づいて戦えば殺人を犯すことは不可避であり、人間としての倫理を全うすることが出来ない。他方で、戦わなければ戦士階級としてのカースト義務を果たすことが出来ない。したがって、アルジュナが「殺せば罪になるから戦わない」と考えるのに対して、クリシュナが彼を戦いへと促すためには、「殺す」の意味を無意味にする、つまり、「殺すことは殺すことではない」という意味に理解させるか、「殺しても罪にはならない」という根拠を示すか、のどちらかしかない。前者に対する理由付けが、個我(魂)は永遠不滅であるから敵を殺しても殺したことにはならないという哲学的見解であり、後者に対する理由付けは、カーストの義務から生ずる行為については結果を思い煩うことなく無執着を持って執り行えば、殺人を犯そうとも、罪を犯したことにはならない、というカーストの論理にもとづく見解である。すなわち、アルジュナが属するクシャトリヤの義務は戦うことであるから、むしろ戦いにおいて敵を殺すことは名誉であり、戦わないことこそ「自己の義務と名誉を捨て、罪悪を得る」(II, 31-33)。これら二つの理由付けが前節で述べた二つの命題に対応することは言うまでもない<sup>10)</sup>。

フンボルトは行為をカースト義務の遂行と捉えるこの考え方を宿命論(333)と呼び、個の自由とは相反する考え方だと理解している。これについては、次

節「ギターへの疑念」で改めて考察してみたい。

第三に、永遠の自然は神と同一であって、その変化の車輪を常に回し続けなくてはならない。したがって、唯一の行為者は、実は、個物を内に包摂する神だけである。現世に目のくらんだ者だけが行為の基礎は自分自身にあると考えるが、賢者は自分自身を行為者とは思わない。賢者にとってはすべての対立物は同じものである。というのも、自己の好き嫌いから発する二者択一の幻惑からすべての混乱が生じることを彼は知っているから。行為の結果にこだわらないことは、行為を神に預けることであって、このため罪により汚されることはない。こうすれば行為しても行為したことにはならない。このようにして行為と非行為は同一の概念へと解消される。

さて、ギターのこれら二つの命題の中でもフンボルトによりいっそう印象を与えたのは、後者の、行為のヨーガの理念として知られる「結果を考慮することなく行為せよ」という教えである。もちろん、彼はこの場合この教えをカースト義務から独立したものとして理解しているのではあるが。彼はこの教えについて次のように述べる。「[ギターへの] 作者はほとんど各章で一カ所以上で、行為の結果の放棄、行為の結果に対する無執着、いや無関心への必要性へと立ち戻っている。そして行為の結果に対する無関心は、実にたびたび繰り返される行為の要求と相まって、哲学的にほとんど崇高ともいえる魂の状態を表しており、同時にまた、大きな詩的效果も生み出している」(195)。

### 1.5 ギターへの疑念

フンボルトはギター論第一部の終わりで、彼のみならず普通のヨーロッパ的倫理観の中で育った人ならば必ずや持つであろうギターへの疑問を率直に表明している。

すでに取り上げたように、アルジュナの心情が、人間として果たすべき倫理とクシャトリヤとして果たすべきカースト義務との間で引き裂かれた状態にあるとき、クリシュナはカースト義務を優先させ、このように教えた。「だれもがもって生まれた自分の身分に相応した仕事を、たとえ罪を犯すことがあろうとも行わねばならない<sup>11)</sup>。というのも、すべての行為は罪に覆われているのだ。ちょうど火が煙に覆われているように」(XVIII, 48)。フンボルトは率直に、こ

のクリシュナの説明を「奇妙だ」(231)と言い表している。

ギター論の第二部でも、フンボルトはギターの構成を検証した際に、体系の前半と後半で互いに矛盾する概念はないと断言した後で、再度、あらかじめ定められた悪い運命といった考え方には違和感を感じる、と述べている(333)。というのも、詩の他の部分で基礎となっている「しっかりと神に心向ければ、どんな身分からでも完成に至る」(XVIII, 65f.)という考え方は、悪運のもとに生まれてきた人の運命の是認、つまり運命の善し悪しは生まれる前から前もって決まっているという考え方と矛盾するのではないかとフンボルトには思われるからだ。例えば、クリシュナは次のように言っている。彼は阿修羅的資質のもとに生まれた人を、「輪廻において、絶えず阿修羅的な胎内に投げ込む。[...] 彼らは生まれるごとに迷妄に陥り、私〔クリシュナ〕に達することができず、それから最低の帰趨に赴く」(XVI, 19f.)、と。クリシュナはここで、阿修羅的運命を持って生まれた人々の救済を未来永劫全面的に拒絶しているように見え、これは、確かに彼がギターの他の箇所ですべて約束している彼の人々への恵み、恩寵と真っ向から対立するように見える。

神的運命と阿修羅的運命のもとに生まれた人とがいることにおいては、人間自身の意志ではどうにもならない、それとは無縁な神の摂理、宿命が認識されるのであるが(231)、フンボルトはこの問題を、結局ここで言い表されているのは、単に自然の連鎖の中に必ずある宿命ということであって、宿命というものを、ある事実、つまり、無制限な、事物の本質それ自体に宿る不可能ではなく、むしろ、(神の恵みによって) 制限を受けた不可能だ、という風に解釈しようとしている(333)。

このようにフンボルトがギターについて感じる疑問はもっぱら、ギターにおいて人間一般の倫理とカーストの倫理どちらを取るかが論じられるとき、顕在化してくると言っていいたいだろう。フンボルトの疑念はつまるところ、行為の唯一の正当な動機はスワダルマ(自己の義務)、つまりカースト制度に基づく職業義務にある、というギターで述べられている行為の根拠付けは、カースト制度は倫理にではなく出生、すなわち自然の事実に基づくから、それは倫理的正当性を欠くのではないかと、ということであろう。

とはいえ、フンボルトはこのようなギターの教えや運用の仕方を見て、不

条理を感じつつも、こう結論づけている。すなわち、「倫理的自由と、相互に制約し合う自然事象と行為の連鎖とを統合することは、正直に言えば、どんな哲学体系においても解決不可能な課題である」(231)<sup>12)</sup>。ここから理解されるのは、アルジュナが戦いを前にしてクリシュナに発した倫理と義務の対立をめぐる同じ問いを、数千年の時を経て、フンボルトもまたここで共有し、さらに意味を広げてこれを自由と運命に関わる問いとして捉え直して、彼なりの答を見つけようとしたことであって、この意味で、フンボルトの「行為のヨーガ」をめぐるギター理解は、解釈学的というだけでなく、実存的といってもいいであろう。

以上、ギターにおける行為のヨーガについてのフンボルトの理解を辿ってみた。

## 2. ギターの語り方

### 2.1 ギターの非体系的性

フンボルトによると、ギターの語り方、つまり語りの進め方は非体系的である(325)。すなわち、ギターの語り手は究極の認識を得た感動ゆえに、聞き手の情緒に訴え、様々な仕方で霊的效果、内的共感をもたらすように語っている賢者であって、学問の対象を特定の方法に基づいて分類して、精巧な思想体系に基づいて自分の学説の最終命題にたどり着くような哲学者ではない。

ここからギターの語りのいくつかの形式上の特徴が導き出される。つまり、部分から全体が徐々にできあがっていくのではなく、フンボルトが言うように、一枚の絵を覆っている霧が、光が増すにつれて徐々に追い払われて、絵に描かれた事物が突如として全体の姿を現すように明らかになっていくのである(325)。すべては、つながりは緩やかであるけれども、ひたすら自然で、意図的に考え抜かれたのではないような仕方で、つまり、クリシュナという教える者の心情とアルジュナという教えられる者の印象があらかじめ先行きを予示するようなやり方で、究極目標に近づいていく。二行からなる各詩節はそれ自体完全な文として成り立っていて小さな全体を形成している。それらは、アルジュナの質問もしくはクリシュナが取り扱う命題を告げることから始まり、例外なく、説論、約束などを含む教え全体を総括する結語で終わる。

## 2.2 教えの反復

ギターにおいては、各主要箇所て明白なものがいまだ神秘的で謎めいたものと組み合わせられ、ギターの作者はこの謎めいたものに立ち戻っていく。したがって、同じことが何度も異なった状況でも繰り返される。まるで言い聞かせるかのように何度も同じ詩節が繰り返されていることは、説諭的で志操、信仰、行為といったものを要求するギターのような詩では、その性格からして、それほど違和感を感じることはないが、ある命題がさらに別の箇所で繰り返し述べられるときには、それがさらに注意深く詳述されたり、新たなつながりの中で示されたりする。してみると、各命題の証明は隔たったところから異なった形で示されるのであって、このことはつまり、ギターが取り扱う諸命題の解説が不可避免的にいろいろなところへ散らばってしまうということを意味する。

インド詩芸の哲学表現はギター編集以前にすでに出来上がっており、そのような韻文の概念結合は習慣的にいわば哲学上の決まり文句、すなわち箴言として用いられ、こうしてギターのある詩節の半分、もしくは全部が既出の詩節の繰り返しになっているところもある。前者の例は、III, 23-b と IV, 11-b, そして VI, 31-b と XIII, 23-b, また後者の例は VI, 8-b と XIV, 24-a, そして III, 35-a と XVIII, 47-a などがそうである。他方で、ギターと他のインド古典、例えば、マヌ法典との間の詩節の一致も指摘することが出来、やはり箴言がすでに当時の知識人の中で普及していたことを物語っている<sup>13)</sup>。

## 2.3 後代の補足の可能性

ギターの作者は人生の究極の認識を得た喜びを詩歌にした詩人であったことはすでに触れたが、そもそも、ギターの詩全体は、単一の詩人、単一の時代、単一の体系に属するものなのか、そしてまたそうであったとしても、まとまったものと考えられて書き著わされたのか、それとも詩人自身の個々ばらばらな教えから出来ていて、後に寄せ集められたものなのか、を問わざるを得ない。章の配列からすると、単一の目標が方法的に追求されているのではなく、個々の問題点についての議論が個々別々に並置されている。フンボルトによると、ギターを各章に分けて配置したのは、後代になってからではなく、原作

者本人によるもので、ギター原作者はいつも、一定のあまり多くない分量の題材を扱い、語りのたびごとにそれを配置したと見られる。

そして、このような形式は、古い詩の調子を変えずに後代の挿入や補足を行うことはギターではそれほど難しくなく、そのようなことが実際にあったと大いに推測できる。つまり、後代の別の作者が異なった自分の作品を挿入するには、ギターの詩形式はきわめて都合がよかったのである。したがって、すべての章が現在の形で元の作者に帰せられるとしても、後代で個々の教えとして寄せ集められ、つなげられていったのだと思われる。

すべての章の中に、後になってからきつとさらに継続発展させられたのだろうと考えざるを得ないほど完結した完成度を持った概念が非常に少ない理由は、以上のことから説明される。もし全体のイデーというものがあって、最初の輪郭を決定していたのなら、個々の教えのつながりはもっと密なものになっていただろう。これは元のギターがイデーを意図的に展開したものではなく、自然に出来上がっていったことを物語るものである。

それぞれの章全体が本当に同一の作者によるものでないとしたら、各章の記述も様々な主張の羅列に過ぎなくなるので、ギターを一つの体系として論じる価値はなくなる<sup>14)</sup>。しかしフンボルトは、だからといって、ギターの記述を体系的でないから、と言って非難を浴びせるのは正しくないと言べる。なぜかという、詩全体として相矛盾するものは何もないからである(333)。

## 2.4 転回としての第 11 章

ギターの物語全体の流れの中での一つの大きな区切りや作者の立脚点の変更といった可能性を考慮すると、そのような転換点は確かに第 11 章の終わりに認められる。ギターが叙事詩マハーバーラタの一エピソードだということを考えると、そのエピソードの中心はアルジュナの友人で彼の戦車の御者であったクリシュナが神としての自らの姿をアルジュナの前に現すところであり、これを境にしてギター全体を二つの部分に分けることが出来る、とフンボルトは述べる(326)。ギターのエピソードの始まりは、すでに見たように、人間の姿をした神クリシュナが、戦いが今にも始まろうとしているとき、アルジュナが「私は戦わない」と言ったことをきっかけに、アルジュナが戦いを始めるよ

う哲学の教えを説き始めたことであつた。第 11 章の始めで、アルジュナはクリシュナが神であることをようやく認識するに至り、「主よ、もし私が見ることが出来ると考えられるなら、[...] 私に不滅なるご自身を見せてください」(XI, 4) とクリシュナに嘆願する。するとクリシュナはアルジュナに応じて彼に天眼を授け、自分が聖バガヴァット、すなわち神であることを、その真の不滅なる姿において示す。

「アルジュナよ、見よ。幾百幾千と、神聖にして多様な私の姿を。種々の色や形を持つ姿を。見よ。アーディティヤ神群、ヴァス神群、ルドラ神群、アシュヴィン双神、マルト神群を。未だかつて見たことのない、多くの驚異を。見よ。今日ここに、私の身体の中に一堂に会している、動不動のものに満ちた全世界を。そしてその他あなたが見たいと望むものを。しかしあなたは肉眼によっては私を見ることが出来ない。あなたに天眼を授けよう。私の神的なヨーガを見よ」。(XI, 5-8)

サンジャヤは語った。——王よ、偉大なヨーガの主ハリ（ヴィシュヌ）はこのように告げると、アルジュナに最高の主の姿を見せた。多くの口と目を持ち、多くの希有の外観をとり、多くの神々しい装飾をつけ、多くの神の武器を振り上げ、神々しい花輪と衣服を着け、神々しい香油を塗り、一切の驚異よりなる、あらゆる方角に顔を向けた無限なる神の姿を。もし天空に千の太陽の輝きが同時に発生したとしたら、それはこの偉大なお方の輝きにも等しいかも知れない。その時アルジュナは、神の中の神の体において、全世界が一堂に会し、また多様に分かれているを見た。そこでアルジュナは驚きに満ち、総毛立ち、頭を下げて神に敬礼し、合掌して告げた。(XI, 9-14)

アルジュナはこの時までクリシュナを神と認識しえなかつたことを彼にわびて次のように言う。「私は友人だと思い無礼にも言った。『おお、クリシュナよ。おお、ヤーダヴァよ。おお、友よ』と。私があなたの偉大さを知らないで、不注意から、また親愛の情から言ったことを、あなたにお詫びする」(XI, 41)。そ



の後、第 11 章の終わりで、クリシュナの神としての真の姿を見て恐怖に震えおののいていたアルジュナの懇願を聞き届けて、クリシュナは再び元の人間の姿に戻る。

ギーターのエピソードがここでピークを迎えたことにより、この章がギーターの前半と後半の分かれ目に相当する。すでに触れたように、ギーターではすでに前で述べられた事柄が、後でさらに付け加えられ説明を与えられることがよくある。第 11 章の最後でクリシュナが元の人間の姿に戻ったことによって、ギーターは物語として新しい様相を見せる。とはいえ、最初の 11 章の中にクリシュナの教え全体はもうすでに含まれているので、残りの章はその教えの繰返しの感が強い。第 11 章の詩節の後に、ギーターの最後のエピソード、すなわち、アルジュナが再び武器を持って立ち上がる決意をする第 18 章の終わりの部分が続くとしても、フンボルトによると、なるほど三つの自然の性質（グナ）の教えの説明が不十分になるかも知れないが、詩全体に違和感が生じるようには見えない(327)。

大事なのは、ギーターのこの最後の章では、人間とクリシュナとの関係において決定的なこと、すなわち、自分の行為の結果をクリシュナに無条件に預けることによって彼に帰依し信愛（バクティ）を捧げる者に対して、クリシュナはそのような者をあらゆる罪悪から救済し、クリシュナのもとに至らせることを保証していることである。すなわち、

「一切の義務（ダルマ）を放棄して、ただ私にのみ庇護を求めよ。私はあなたをすべての罪悪から解放するだろう。嘆くことはない」。(XVIII, 66)

「私に最高の信愛を捧げ、私の信者たちの間にこの最高の秘密を解く人は、疑いなくまさに私に至るであろう」。(XVIII, 68)

ここでは、どんな人でも、クリシュナに信愛を捧げること、すなわち「信愛のヨーガ（バクティヨーガ）」を行うことさえ出来れば、これによって最終的に彼のもとに行くことが出来るという「良き知らせ」が語られているのである。アルジュナはこれを聞いて、ようやくこれまでの迷いに打ち勝ったことを以下のように告白する。

「迷いはなくなった。不滅の方よ。あなたの恩寵により、私は自分を取り戻した。疑惑は去り、私は立ち上がった。あなたの言う通りにしよう」。  
(XVIII, 73)

このように、最後の章で、クリシュナの献身者への救済への保証と、クリシュナの勧めに従って、アルジュナが戦いの開始を明言することにより、エピソードとしてのギターは完結する。

## 2.5 前半部と後半部

フンボルトによると、第 11 章を境にして区切られる詩のこれら二つの部分、第 1 章から第 11 章までと第 12 章から第 18 章までには配列の仕方に違いが見られる(327)。前半の 11 章では前もって設定された前提から結語に至る歩みが認められるのに、後半の 7 章では、原作者は、もっぱら自分の関心から来る個々の問題点を優先しているように見える。第 13 章では質料とそれに通じた者、第 14 章では三つのグナ、第 15 章ではプルシャ、第 16 章では神的運命と阿修羅的運命、といった具合である。また、精神（プルシャ）と物質（プラクリティ）の概念については第 13 章よりも前の章では全く触れられておらず、追加のような体裁をなしている。こうしてみると、後半部はよりドグマ的な色彩が強く、学となった哲学に属するような議論や作為的な議論を多く含んでいる。

とはいえ、フンボルトによると、二つの部分の違いにあまり決定的な重きを置くべきではない。後半で述べられた概念は基本的には前半でも同じ仕方で取り上げられているからである(332f.)。

ギターを一通り読み終えてみると、原作者がすでに論じたもので十分に論じきれなかった命題や、あらたに付け加えてほしかった概念がいくつかある。フンボルトによると、例えば、母胎としての神性ブラフマン、そして精神について、祭祀について挙げられているもの、などはもっと詳しく扱ってほしかった教えである(327)。そして、これまで同一の命題が様々な形で何度も繰り返されたことを考えると、第 18 章の後に、以上の教えを補足する章がまださらに続いたかもしれないという可能性も否定できない。

### 3 哲学詩

#### 3.1 詩と哲学の一致

フンボルトによると、ギーターは本来の「哲学詩」の概念と合致している。それは真の自然詩である。すなわち、哲学と詩は同じ土壌から成長し、人間の至高のもの、最も奥深いものから由来している。つまり、それは詩でありながら、「完全な哲学体系」であって、意図的に考案された芸術形式が支配するいわゆる哲学的な教訓詩とは全く異なる。真の哲学詩とそうでないものとの違いは、詩と哲学が有機的に結合して自らの源泉からくみ取られているか、それとも単に機械的に結びついているだけか、にある。それでは、哲学詩が成立するための詩の条件、哲学の条件とは何であろうか。

#### 3.2 詩の特権

フンボルトにとって哲学詩とそれが体現する真理は、人間悟性の支配する領域にはない。「真の哲学詩とは、詮索好きな悟性が原因から結果を類推することをあきらめるようなところ、そして真理が精神の浄化と方向付けを通して、あらゆる討論術の外見を取り除くことを通して、純粹意識の高まりから燃え上がる場所、そこにまで哲学が立ち戻るとき、始めて可能になる」(335f.)。すなわち、想像力の跳躍の中で、真理という哲学の本質を堅持する強靱さを詩人が内に感じる領域にこそ、真の哲学詩は存在する。

哲学詩においては有限と無限の二つの領域が接触し、浸透しあっている。そして、クリシュナの教えは有限と無限の接点をめぐって動いている。「詩の特権とは人間の不可分の本質を追求し、人間の有限な性質が無限への予感の中で消え失せるところにまで人間を連れて行くことにある。詩はその目標が達成される限りでその名に値する」(335)。有限と無限の分離は永遠の、議論の余地ない自明な真理だから、有限がどこから無限に変わろうとも、哲学詩はいつも両者が分離する地点に立っていないなければならない。

このような詩は、真理を無限からこちらに向かって燃え移ってくるものとして描き、かつまた、有限なものの持つ限界を、理性が抱える矛盾への洞察を通して、あまりにも窮屈なものとして描いてしまうことだろう。というのも、有限にとらわれた精神の絶望もまたこの詩のテーマの一つだからである。こうし

て、人間の内なる感情が最初の楽音に刺激されて、感覚が芸術感性によって浄化されると、無限なものと同類となる。ギターにおいて創造的想像力は有限な自然を自らのうちで解体しつつ、想像力の形式の中でそれを維持することが出来るので、その結果、あらゆる感覚的刺激を純粋な理想的観照へと解消することが出来る(335)。

### 3.3 内的感動の哲学

詩と哲学が相応の仕方で結合するものなら、哲学とは内的感動という見えざる力によって生じるようなものでなければならない。詩の高揚感とは真実を精神の深みから呼び起こすのに不可欠である。哲学の教えは飾りものとして詩のおおいを求めてはならない。それは内的衝動から自由なリズムであふれ出るもので、自然でかつ持って生まれた形式のように詩の中で躍動しなければならない。クリシュナの教えでは詩人と哲学者がまだ分離していない。哲学用語の定義が問題になっているとき(XIII, 2)でも、クリシュナはこれに詩人の言語を使用している。

内的感動から生じる哲学の範例は、歴史的事象についての哲学的認識を伝える叙事詩において端的に示される。フンボルトは言う、歴史も本来の叙事詩の中では、後の学問的取り扱い方よりも純粋かつ完全である(336)、と。というのも、叙事詩の中でこそ歴史はその進路をよりはっきりと示すのであり、「偶然のきっかけや自然の連鎖を通してつながった事件を、イデーやその他の領域からの駆動力の展開として」(336) 開示するからだ。叙事詩ギターから発せられるのも、もっぱら哲学宗教精神によって形成された歴史イデーであって、このことは、詩と哲学を司る祭司階級バラモンがカースト制において占めた第一の政治的地位と同様、哲学の認識を述べ伝える叙事詩においても最も大きな影響力を発揮したという事実から説明される。ちなみに、フンボルトによれば、叙事詩としてのギターを他の古代インドの文学作品と比べてみても、ギターはヴェーダやプラーナ(古伝説)、マヌ法典よりも哲学的で、神話の不純物から免れている。また、ギターの崇高さ、明確さ、その短さの中で完結した形式を考えると、ウプネカト(ウパニシャド)はこれに比較すべくもない(339f.)。

### 3.4 ギターとギリシャ詩

フンボルトはギターをギリシャ人の詩と比較することによって、さらに哲学詩としてのギターの固有のあり方を明らかにしようとする。彼は詩が形式を意識することのうちに、芸術としての詩の始まりを見ている。しかるに、ギターでは詩の内容と形式は無意識のうちに分かちがたく融合している。それは、自然詩そのものであって、詩人が形式を単なる形式として考え、意図的に形式を作り上げていた形跡は全くない。換言すれば、詩が詩であるゆえんは、それが形式それ自体によって思想を共有しようとするところにある。ギターは古代インド詩が成立した時代の終点に位置しており、詩形式を意識する芸術にまだ移行していない時期に成立し、そこに長い間とどまっていたと考えられる。すなわち、フンボルトによると、未だ分離していない詩と哲学が人間精神の性質に基づいて歩むべき道において、インド詩はギリシャ詩よりもずっと古いので、このためインド詩は自然詩の無邪気さをまだ残しているが、ギリシャ詩ははっきりとした芸術意識のもとで生まれた(339)。

フンボルトによると、どの時代でも哲学はギリシャよりもインドで詩と深く結びついており、ギターの哲学表現はギリシャ詩よりもずっと完璧である。フンボルトはこのことを、ルクレティウスを例にとって説明する。なるほど、ルクレティウスとギターとの間には、存在から非存在への移行が不可能であるという想定に見られるように、いくつかの接点はあるが、基本的にはすれ違いしか見いだすことが出来ない。フンボルトは、ルクレティウスの詩は彼がギターに加えたような評価にとっても耐えうるものではないと見て、ルクレティウスの詩についての考え方は最初の構想からして間違っている、と述べている(337)。ルクレティウスの哲学は、すべてを自然の根拠から説明することを原則としながら、自然を超え出て行く必要と可能性を否定し、あるときは自然をこまごまとしたやり方で、またあるときは露骨にずさんな仕方でも、説明しようとする。彼の詩と哲学はお互いに何の接点も持っておらず、詩は哲学にとって見えないのいい表現、偽りの飾り物として使われているに過ぎない。

また、ギリシャには詩芸術という意識によって詩作していた詩人たちもいたが、彼らの詩作の理由は、散文臭さを避けるためであって、散文の補助手段として詩の韻律と厳粛さを借りてきただけであった。「遺憾なことに、しばしば行

われる〔ギターと〕ホメーロスやギリシャ人の比較は、私にはまったく不適切だと思われる。これに対し確かなのは、このマハーバーラタのエピソード〔ギター〕は、我々が知っているすべての文学の中の、最も美しい哲学詩、いやそれどころか、もしかすると唯一の真の哲学詩であるかも知れない、ということである」(159)。

### 3.5 散文の起源、すなわち哲学と詩の分離

詩は感動から生まれる。だから、精神を生き生きと感動させるものすべては、いつの時代もどんな精神においても詩的精神を帯びるものである。そして、詩的精神に由来する生のままの思考や純粹な観照は、かつてはそれ自身の中で開示された。しかし、習得された事柄が次第に増加していくにつれて、知的観照や認識はやがてこの感動させる力を失っていく。今日我々は多くの、現実の様々なものに囲まれて、さらに世俗の営みに沈み込んでいるので、抽象化という労力を払ってこれらの思考や観照に達するに過ぎない。

日々の生活の必要性和イデーや感情表現などといった内的欲求に基づく言語使用は、話者が両者では全く別の気持ちになっているので、当然異なる。話者の中で思考が鋭敏かつ純粹になっていくと、その分、精神は話の形式と内容の不一致に耐えられなくなる。フンボルトによると、ここに散文の起源がある。話の形式への注意が注がれるようになってくると、ようやく韻文と散文の区別が生じる。言い換えれば、詩の形式の芸術的扱いが始まるところに散文が成立する。したがって、詩が自然の感動を自由に吐露できなくなり、芸術がそれ自身を芸術として意識し、様々な人間精神の諸力が働き始めるようになると、詩と散文は分離すべきである。というのも詩と散文は互いに自己の領域を制約し合って動くものだから。フンボルトによると、詩形式を芸術として認識することにより、両者の分離をどの国民よりも完璧に行った国民こそギリシャ人なのであった。

フンボルトはギターに見られる哲学詩がその後衰退し、消滅してしまった理由はどこにあるのかを見極めようとし、また哲学詩というものが現代において再生可能かを問いかけている。フンボルトによると、詩は、精神の様々な努力がそれぞれの道を切り開き始めるとき、そこから分離し始める。すなわち、

哲学が学としての道を歩もうとするところでは、哲学は詩と分離していく。だが、それにもかかわらず、哲学がなおも詩的装いを維持しようとしたら、このことは明らかに誤りである。学問的哲学は討論術(Dialektik)を必要とするが、それは真理そのものを発見し、真理のために道を開き、理論が妥当性を持たない領域を理性と悟性の原理を用いて引き離すためである。すなわち、討論術は詩の本質と基本的に矛盾するのであって、最高度の熟練と繊細さに達した散文を要求する。だから、哲学はその幼少期にずっととどまって詩と結びついていくべきだなどとはいえない。幼少期の人類の英知は、まだ経験知によって散失していなかった。それは証明や議論を通して道を切り開くことを拒絶する神的英知といわれるべきである。このように、現代において真の哲学詩が可能かどうかについては、フンボルトはきわめて懐疑的である。

#### 4. 結論

以上、フンボルトのギーターにおける「行為のヨーガ」解釈、ならびにフンボルトが見たギーターの詩形式における特徴、とりわけギーターの詩の形式と内容の関係を説明する「哲学詩」の概念について触れておいた。

さて、フンボルトがギーターに着目しこれを評価するようになった経緯とその様子は以下のようなものであった。すなわち、ポップのもとでサンスクリットを学んだフンボルトは、古典古代ならびに近代の言語の文法形式はサンスクリットに由来しており、したがって、それは諸言語の源泉に他ならない、との見解に達した。さらにこのような言語研究から彼の関心はインドの歴史と哲学にまで及び、ギーターとの集中的な取り組みが生じた。というのも、いうまでもなく、ギーターのような古代叙事詩においては、世界を言語のうちに捉えることを通して獲得されていく民族の世界認識の本来的なあり方が示されており、叙事詩の中で意味された事柄を確定しうるためには、是非とも歴史哲学的解釈が必要になるのであって、ギーターへの言語学上の関心は必然的にそれへの歴史哲学上の関心に向かわざるを得ないからである。

すでに見たように、こうしてフンボルトがギーターのうちに認識するのは、すべてが未分化な神話的世界であって、そこでは詩と哲学がまだ分離しておらず、両者は単一の、根源的でより高い力の、あるがままの表出に他ならないので



ある。このような理由から、彼は詩としてのギターを「完全な哲学体系」と表現し、これを詩と哲学の総合と見て高く評価したのであった。

またギターの哲学内容に関しても、フンボルトは行為のヨーガの理念である「結果を考慮することなく行為せよ」という教えのうちに「哲学的にほとんど崇高ともいえる心のあり方」を認め、同時にまた、「大きな詩的効果も生み出している」と述べ、高く評価したことはすでに見たとおりである。他方で、行為そのものを根拠づけるカースト義務については、それは自然の事実に基づくものであるからその倫理的正当性に疑念を投げかけたが、それ以上には立ち入っておらず、各読者にその判断をゆだねているように見える。

いずれにせよ、フンボルトにとってギターが持った意義を、彼は1823年6月21日付けのシュレーゲル宛て書簡の中で以下のように言い表している。「私は読んでいくうちに何度も、たった今私がそう感じているように、かくも正確に原語でこの詩を理解するという機会を与えてくれた運命に対し、心から感謝の気持ちが沸いてくるのを抑えることが出来ません。もしこれなしに、私が世を去らねばならなかったとしたら、真に本質的なものを私は見出せぬままでいただろう、という気がしてなりません」<sup>15)</sup>。

フンボルトは論文の冒頭で自分のギター論の執筆動機を、ギターの哲学体系をインドに通じていない人にも理解してもらえるように、出来るだけ簡潔に解説することだ、と述べている(190)。フンボルトにとって解釈というものはもともと常に未完なものであって、彼は自分のギター解釈は最初のアプローチであり、あくまでも示唆、刺激にすぎず、徹底的な解釈ではないことを強調しているが<sup>16)</sup>、これは自らのギター解釈に対する、とりわけ、自らのギターへの疑念に対する判断を、すなわち、クリシュナの教えにおける義務と倫理の対立を運命と自由の対立としてより広く捉え直しながら、両者の克服を、人間が生きていく限り常に直面せざるをえない問題として、彼のギター論の読者一人一人にゆだねようとしたからであろう。

フンボルトが「翻訳は元の意味に近づくこと」(168)だから、「解釈は翻訳を超えて常に原典に依拠しなければならない」と考えていたことからわかるように、彼はギターの原典そのものに遡ってギターを理解しようとしたのであり、この意味で、フンボルトの言語学的文献学的ギター理解は解釈学に基づ

くギターの内在的理解を、さらに言えば、ギターの問いを彼自身への問いとして共有した点において、ギターの実存的理解を示すものと言えよう。

周知のように、フンボルトの同時代人ヘーゲルは彼の歴史哲学において歴史の終末における「絶対精神の自己実現」という視点から歴史の意味と価値を認識しようとした。ヘーゲルが彼自身のギター論<sup>17)</sup>でこのような歴史図式の中でギターを位置づけることになったのは、フンボルトのギター論出版のわずか半年後であって、彼は自身のギター論を執筆するために、すでに取りかかっていた『エンチロペディー』の第二版の仕事をあえて中断するほどこれに高い関心を示していたという。ヘーゲルは、フンボルトの、倫理と義務の対立、自由と運命の対立をどのように克服するかという問題提起に応えて、これに答えることを彼のギター論のそもそもの出発点としたのであった<sup>18)</sup>。

こうして、フンボルトはヨーロッパでギターを原典に則して論じた最初の人物となり、その、ギター理解の内在的性格ゆえにギター解釈の範例であり続けているのである。

## 注

- 1) A.W. シュレーゲルは 1814 年パリでフランツ・ボップからサンスクリットを習った後、1818 年にボン大学においてドイツで最初のサンスクリット講座が開設されたとき、その初代教授に就任した。インド叢書出版(1820)により、言語学上の分野にとどまらず、ドイツにおけるインド文学に対する一般の関心を覚醒し、これを広範に紹介したのは、シュレーゲルの功績である。なお、シュレーゲルはタイポグラファーとしてサンスクリットの活字、デーヴァナーガリー文字の活字を自らデザインし、これを鋳造し、デーヴァナーガリー文字によるギターの印刷を可能にした。これについては、赤松昭彦、『バガヴァッド・ギター、神に人の苦悩は理解できるのか』97-111 ページに詳しい。
- 2) フンボルトはすでに 1822 年に、サンスクリットについて包括的に論じた最初の言語学論文「サンスクリットにおける接尾辞 tva ならびに ya によって構成された動詞形について Ueber die in der Sanskrit-Sprache durch die Suffixa tva und ya gebildeten Verbalformen」を発表している。
- 3) アレクサンドル・ラングロワ(1784-1854)。彼の批判の趣旨は、誤訳の指摘の他に、シュ

レーゲルが、訳語に首尾一貫性を欠いていること、例えば、彼が「ヨーガ」というサンスクリットの語に 10 以上のラテン語の訳語を当てたことに見取られるように、原語の単一の語に対して数多くの訳語を用いていること、他方で原語は各々異なるのにもかかわらず同一の訳語を当てていることを批判し、単一の語に対しては相応する単一の訳語を当てべきだ、と主張した。これへのシュレーゲルの反論は『アジア学雑誌』第 9 号に掲載されており、彼は、インド固有の哲学宗教概念でヨーロッパの言語に直接訳し得ない語彙を原語のまま残したウィルキンズのギーター訳に言及しながら、彼とは異なり、自分は何とかこれに近い訳語をその都度文脈に即して当てようと努力したのだ、と弁明して、こう述べている。「私はできる限りうまくすべての語をラテン語に置き換えるという厳格な規律を自らに課した。プラトンやアリストテレスの作品の翻訳がギリシャ語でいっぱいだったら、人は一体どう言うであろうか」(赤松昭彦、前掲書、115 ページ)。

- 4) その後このコメントは、シュレーゲルが 1820 年に創刊した「インド叢書(Indische Bibliothek)」2, no. 2, 218–258(1826). 2, no. 3, 328–372(1826)に掲載された。
- 5) サンスクリット原典に基づくギーター本文の邦訳には、『バガヴァッド・ギーター』、上村勝彦訳、岩波文庫、1992 を使用した。引用に際しては、章番号ををローマ数字で、詩節番号をアラビア数字で( )内に記した。
- 6) フンボルトの引用は以下の版による。Wilhelm von Humboldt, “Ueber die unter dem Namen Bhagavad-Gita bekannte Episode des Maha-bharata”, in: *Wilhelm von Humboldts Werke, Bd.5, 1823–1826*, hrsg. von Albert Leitsmann, Berlin 1906, 190–231, 325–343. ならびに “Ueber die Bhagavad-Gita. Mit Bezug auf die Beurtheilung der Schlegelschen Ausgabe im Pariser Asiatischen Journal”, in: a.a.O., 158–189. なお、この巻からのフンボルトの引用は、ページ数のみを( )内にアラビア数字で記した。
- 7) 世期(ユガ)は四期に分けられる。四ユガをあわせたものが大ユガであり、これは四百三十二万年に相当する。『バガヴァッド・ギーター』、上村勝彦訳、訳注、161 ページ参照。
- 8) 純粹精神ブルシャに対する現象世界の根本原質ブラクリティは、三つの性質(トリグナ)、すなわち、純質サットヴァ、激質ラジャス、暗質タマスによって構成されている。
- 9) フンボルトはラングロワがこのダルマ dharma という言葉の意味を広く取りすぎて「家族の義務」と捉えたことを批判して、ここでは、政治に関わる生活をする種族、クシャトリアのことが言われているのだから、道徳ではなく、国家制度、カースト差別のことが言われている、と正しく指摘している(160f.)。

- 10) この部分の考察は赤松昭彦氏の論述（前掲書、66–70ページ）を参考にさせて頂いた。  
この場を借りてお礼を申し上げたい。
- 11) 上村訳では「生まれつきの行為は、たとえ欠陥があっても捨てるべきでない...」（137ページ）。
- 12) しかし、フンボルトの遺稿からは、以下のように、カースト制度をはっきり批判した文章が見て取れる。「[...] 私はインドの制度のすべての特質に心底嫌悪を感じる。私の歴史観の原則からして、インドのカースト制度と折り合うことは出来ない。もちろん哲学の静寂主義とも」（B. Gebhardt, “Aus Wilhelm von Humboldts Nachlass”, in: *Nord und Süd. Eine deutsche-Monatschrift*.105 (Jg. 27), Heft 313 (April 1903), 81)。
- 13) 詩節の部分的繰り返し例は、以下の通り：「なぜならもし私が汝々として行為に従事しなければ、人々はすべて私の道に従うから」（III, 23-b）。「人々がいかなる方法で私に帰依しても、私はそれに応じて彼らを愛する。人々はすべて私の道に従う」（IV, 11-b）。また、詩節の全文繰り返し例は、以下の通り：「理論知と実践知により自己（アートマン）が充足し、揺るぎなく、感官を克服し、土塊や石や黄金を平等（同一）に見るヨーギンが、『専心した者』と呼ばれる」（VI, 8-b）。「彼は苦楽を平等に見て、自己に依拠し充足し、土塊や石や黄金を等しいものと見て、好ましいものと好ましくないものを同一視し、冷静であり、非難と賞賛を同一視する」（XIV, 24-a）。なお、ギーターとマヌ法典の詩節の表現の一致については以下を比較参照のこと。前者には「常修のヨーガに専念し、他に向かわぬ心によって念じつつ、人は神聖なる最高のプルシャに達する」（VIII, 9, 正しくは VIII, 8）、後者には「正しい生き方（ダルマ）を具現するマヌの子ブリグは、彼ら偉大なりしたちに言った。「行為の実修（カルマヨーガ）のすべてについて、その結論を聴くがよい」（XII,122）（渡瀬信之訳、『マヌ法典』、1991年、中央公論社）。なお、下線はすべて引用者による。
- 14) エジャトンによると、「ギーターは論理的に首尾一貫した思想体系ではなく、作者自身もそのような一貫性を考えたことはなく、そもそもウパニシャドやギーターの時代に哲学体系などというものはなかった」（Franklin Edgerton, *The Bhagavad Gita*, Cambridge 1972, 108）。
- 15) A.W. Schlegel und W. von Humboldt, *Briefwechsel zwischen Wilhelm von Humboldt und August Wilhelm Schlegel – Primary Source Edition*, Halle 1908, 158. 以上のフンボルトの書簡は、彼がシュレーゲルのギーター版を受け取り、最初の10章を読んだ後、即座にシュレーゲルに書き送ったものである。これによって、フンボルトが初めてギーターに接したときの感

動の様子がよく分かろうというものである。

- 16) Vgl. Clemens Menze, “Das indische Altertum in der Sicht Wilhelm von Humboldts und Hegels”, in: *Hegel-Studien, Beiheft 27*, Bonn 1986, 257.
- 17) 「ヴィルヘルム・フォン・フンボルト著、バガヴァッド・ギーターの名で知られたマハーバーラタのエピソードについて Ueber die unter dem Namen Bhagavad=Gita bekannte Episode des Maha-bharata; von Wilhelm von Humboldt」。ヘーゲルのギーター論は『学的批評年報 *Jahrbücher für wissenschaftliche Kritik*』(1827)誌上に掲載された。
- 18) これについては、中村 元、「ヘーゲルのバガヴァッド・ギーター論」、『帝京大学理工学部研究年報人文編』、第 10 号、2002、73-114。

#### 参考文献

- Wilhelm von Humboldts Werke, Bd. 5, 1823–1826, hrsg. von Albert Leitsmann, Berlin 1906.
- A.W. Schlegel und W. von Humboldt, *Briefwechsel zwischen Wilhelm von Humboldt und August Wilhelm Schlegel – Primary Source Edition*, Halle 1908.
- Georg Wilhelm Friedrich Hegel *Gesammelte Werke in Verbindung mit der Deutschen Forschungsgemeinschaft*, hrsg. von der Nordrhein Westfälischen Akademie der Wissenschaften, Bd.16, *Schriften und Entwürfe II (1826–1831)*, unter Mitarbeit von Christoph Jamme, hrsg. von Friedrich Hogemann, Hamburg 2001.
- Adluri, Vishwa and Bagchee, Joydeep. *The Nay Science, A History of German Indology*, New York 2014.
- Baitenen, J.A. Van. *Bhagavad Gita in the Mahabharata: A Bilingual Edition*, Chicago & London 1981.
- Edgerton, Franklin. *The Bhagavad Gita*, Cambridge 1972.
- Gebhardt, B. “Aus Wilhelm von Humboldts Nachlass”, in: *Nord und Süd. Eine deutsche-Monats-schrift. 105 (Jg. 27)*, Heft 313 (April 1903).
- Herling, Bradley L. *The German Gita. Hermeneutics and Discipline in the German Reception of Indian Thought, 1778–1831*, New York 2006.
- Mcgetchin, Douglas T. *Indology, Indomania, and Orientalism, Ancient India's Rebirth in Modern*

Germany, Crunbury 2010.

Menze, Clemens. “Das indische Altertum in der Sicht Wilhelm von Humboldts und Hegels”, in:

*Hegel-Studien, Beiheft 27*, Bonn 1986.

Radhakrishnan, Sarvepalli. *The Bhagavad Gita*, New Delhi 1948.

Zachner, R.C. *The Bhagavad Gita*, Oxford 1973.

赤松昭彦、『バガヴァッド・ギーター——神に人の苦悩は理解できるのか?』、岩波書店、  
2008。

泉井久之助、『言語研究とフンボルト』、弘文堂、1976。

海老沢善一訳編、『ヘーゲル批評集 II』、梓出版社、2000。

上村勝彦訳、『バガヴァッド・ギーター』、岩波書店（岩波文庫）、1992。

上村勝彦、『バガヴァッド・ギーターの世界』、NHK 出版、1998。

亀山健吉、『言葉と世界、ヴィルヘルム・フォン・フンボルト研究』、法政大学出版局、2000。

渡瀬信之訳、『マヌ法典』、中央公論社、1991。